

枕経のお知らせ

ご家族の枕経を検討されている場合は、当寺院の事務所へご連絡いただくようお願いしております。ご希望の時間を調整し、一緒に臨終の仏徳讃嘆のお勤め、もしくは、故人を偲びながら、ご家族の皆さんとお勤めをさせていただきます。

事前にご連絡いただくことによって、ご家族の質問への対応や必要な情報を提供することが可能となります。

トロント本願寺 理事会

祥月法要のお知らせ

祥月法要とは、祥月命日（故人が往生された月のご命日）をご縁として仏法に遇い、阿弥陀さまの仏徳を讃嘆し、報謝の思いでお勤めする法要です。

日時：十月 四日（日）
十一月 一日（日）
（日本語：午前十時四十五分から）
（英語：午前十一時から）

どうぞ祥月でない皆様もご参拝下さい。



JSBTCデーのお知らせ

今年は十月十八日（日）を「JSBTCデー」としてカナダ教団の日のお勤めをいたします。

JSBTC（浄土真宗本願寺派カナダ開教区）は、カナダ各地の浄土真宗寺院を結ぶ組織として、開教使や各寺院の活動、また地域におけるさまざまな取り組みを支えています。本山の西本願寺との大切なつながりを担い、浄土真宗のみ教えがカナダの地においてこれから大切に受け継がれ、伝えられていくための役割を果たしています。

JSBTCと書かれたシールのついた封筒を用いた寄付金は、教団運営の資金として様々な取り組みに使わせていただきます。

カラオケ パーティ

どなたでも大歓迎。私たちと一緒に楽しい半日を過ごしましょう！

二〇二六年十月二十四日（土）
ソーシャルホール 正午十二時開始
参加費 二十ドル

お弁当、踊り、日本の演歌などをお楽しみいただけます。

チケットのお問い合わせは

Jessica まづ

トロント仏教会カラオケクラブ

年次バザーのお知らせ

今年もお寺のバザーは十一月の第二土曜日に開催です

Toronto Buddhist Church
Annual Bazaar
11月14日（土）
12:00 PM - 4:00 PM

十一月 十四日（土）直 橋本
日 杉浦

トロンボお寺の
フットレインジグ バザー

- ・おつまみ・できたてフード
- ・手作り惣菜 & お菓子
- ・サイレントオークション
- ・掘り出し物市

※現金のみ
※ワイパックス持参推奨
※公共交通機関の利用推奨

年次バザーは、お寺の運営を支える大切なファンディングイベントです。サイレントオークションやホワイトエレファントへの品物提供、手作りお菓子のご寄付、出店やボランティアなど、さまざまな形での協力をお待ちしています。

ボランティアのスケジュール等、バザーについての詳細は英語版のニュースレターの記事を確認していただくようお願いいたします。

日本では昔から「秋」という季節は、人々にさまざまな情緒を感じさせる季節として親しまれてきました。例えば、秋を詠んだ和歌や俳句は数多くあります。秋の月、紅葉、虫の声、夕暮れの空――。こうした秋の風景を眺めながら、人々は自分の心や過ぎ去った時間、出会いや別れなどに思いを巡らせてきました。

余談ですが、日本では毎年秋ごろにマクドナルドで「月見バーガー」というものが発売されます。「月見」とは美しい月を眺めて楽しむことです。月見バーガーの中には月に見立てた目玉焼きが入っています。そのコーナーがテレビで流れると、「もう秋か」と思っています。今の日本では、「月見バーガー」も秋の訪れを感じさせるものの一つなのかもしれません。

話を戻しますが、「秋」になると私たちはいろいろな風景を見て思いを巡らします。なぜ、秋になると私たちは、こうした「もの思い」をするのでしょうか。私が思うに、「秋」は私たちに「変化」を感じさせる季節だからかもしれません。夏の暑さが少しずつ和らぎ、日が短くなっていく。木々の葉は緑から黄色や赤へと色を変え、やがて散っていきます。昨日までと同じように見えていた景色が、少しずつ変わっていく。秋は、そうした変化を私たちに目に見える形で教えてくれる季節なのかもしれません。仏教では、すべてのものは変化し続け、同じ状態にとどまることはないことを「無常」といいます。真つ赤だったメープルリーフが朽葉色になっていく。昨日よりも気温が下がっている。今日と昨日は同じではないのです。

そして、それは私たちにも言えます。髪が伸びる。体重が増える。だんだん老いていく。人との関係も変わっていく。出会いがあれば、別れもある。いずれ命を終えていく。私たちは、変化し続ける世界の中に生きています。

仏教では「諸行無常」ともいい、あらゆるものは変化し続け、同じ状態にとどまることはないと説かれています。秋は、変化を私たちに目に見える形で教えてくれる季節です。言い換えれば、「諸行無常」を感じやすい季節なのかもしれません。「もう冬が来るのか」「あれから何年経っただろう」と、時間の流れの早さに驚くこともあるでしょう。そうした思いは、過ぎていく時間を懐かしく振り返るきっかけにもなります。一方で、「歳をとりたくない」「変わりたくない」「このままでいてほしい」と思うこともあります。そこに、私たちの苦悩の思いが生まれるのかもしれませんが。私たちの願いとは関係なく、時間は過ぎていきます。季節は巡り、木々の葉は色を変え、やがて散っていきます。そして私たち自身も、少しずつ変わっていきます。

「無常」とは、単に「すべては変わっていく」という自然の法則を知ることではありません。その無常の世界の中で、「変わってほしくない」と願っている私自身の姿に気づかされることでもあるのではないのでしょうか。

親鸞聖人は、和讃の中で次のように詠まれています。

如来の作願をたづねれば
苦悩の有情をすてずして
回向を首としたまひて
大悲心をば成就せり

これは、阿弥陀如来がなぜ願いをおこされたのか、そのお心を讃えたお言葉です。私たちは、変わり続ける世界の中で生きています。思い通りにならないことがあり、時には苦しみ、悩みます。しかし、阿弥陀さまは、そのような私たちを決して見捨ててくれることはありません。「苦悩の有情をすてずして」とあるように、苦悩の中にいる私たちに向かって、阿弥陀さまの大悲ははたらき続けています。

そして、「回向を首としたまひて」とあるように、そのはたらきは、私たちから阿弥陀さまへ向かうものではなく、阿弥陀さまから私たちへと向けられたものです。無常の中で苦悩する私を、決して見捨てない。その阿弥陀さまの大悲を、この和讃を通して讃えておられるのです。

秋の風景を眺めるとき、私たちは移り変わる季節を見ています。しかし同時に、その景色を見ている「私」もまた、変化のただ中にいることに気づかされます。そのことを思えば、秋の「もの思い」は、ただ過ぎ去ったものを懐かしむ時間ではありません。無常の中に生きる私自身の姿と、そこに向けられている阿弥陀さまの大悲を聞かせていただく、ご縁なのかもしれません。

南無阿弥陀仏
アシスタントミニスター 杉浦輝

そして私たちは、気づかないうちに多くの境界をつくっています。好きな人と嫌いな人、信頼できる人と避けたい人、正しいと思う人と間違っていると思う人。そのきっかけは、とても小さなことかもしれません。送ったメッセージに返事が来なかった。誰かの一言が気に障った。家族が自分の期待したように行動してくれなかった。それだけのことから、私たちの心は、その人についていろいろな印象をつくり始めます。

しかし、本願はそのような私たちの境界によってはたらしき方を変えるものではありません。賢い人や、優しい人、信心深い人、特別に立派な人だけに向けられたものではありません。私たち一人ひとりを、そのままに願いの中に包んでくださるのです。

そして親鸞聖人は、もう一度「海」という譬えを用いられます。それが「群生海」です。この四句の中には、「本願海」と「群生海」という二つの海が出てきます。一つは、阿弥陀さまの量り知ることのできない慈悲を表す海。そしてもう一つは、迷いや執着、怒り、欲、心配、苦しみを抱えながら生きている数限りない私たちを表す海です。

この教えを自分自身に向けて聞かなければなりません。私もまた、この群生海の中にいる一人だからです。たとえば、怒っても状況が良くならないと分かっている、やはり腹を立ててしまします。人と自分を比べないようにしようと思った五分後には、ソーシャルメディアを見て、また誰かと自分を比べています。私たちは多くの場合、どうすればよいのかを頭では分か

っています。しかし、「分かっていること」と「その通りに生きること」は、まったく同じではありません。私は岸辺の安全な場所に立って、どこか遠くにいる愚かな人々の海を眺めているのではありません。私自身が、すでにその海の中にいるのです。

「出世本懐」の教えは、そのような私たちが阿弥陀さまの大きな慈悲を聞くために、お釈迦さまはこの世にお出ましになったのだと教えてくださいます。仏教は、「私はようやく完璧な人間になれたのか」「以前より良い人間になれたのか」と問いかけるところから始まるのではなく、「と問いかけるところから始まるのではなくありません。まず、今の自分自身の姿を見せてください。そしてそれは、ときに耳の痛いものでもあります。

怒れば問題が生まれることも、心配したからといってすべてが解決するわけではないことも、私たちはすでに知っています。難しいのは、分かっているながら、それでも同じように生きてしまうということです。そしてそのようなこの私こそ、決して見捨てられてはいないのだと聞かせてくださいます。

この教えが最も身近に感じられるのは、何でもない日常のひと時かもしれません。夜、布団に入ってその日に交わした会話を思い返しているときや誰かに言われた言葉に傷つき、「あのとき、こう言い返せばよかった」と考え続けているとき。

あるいは、特に悪いことがあったわけではないのに、「まだ足りない」「思い描いていた自分になれていない」と感じるときなどです。

そのようなとき、仏教は単に古い本の中に書

かれた教えではなく、今を生きる私自身に直接語りかけてくるものになります。阿弥陀さまの慈悲に遇うために、まず別の誰かにならなければならない、と仏法は教えているのであります。この不完全な人生のただ中にいる私に、すでに本願が向けられている。そのことを聞かせていただくのです。

合掌

駐在開教使 橋本顕正

秋のものの思い

十月の『佛心』です。



二〇二六年も残り三か月を切りました。時間が過ぎるのが早いです。気温も下がってきており、いよいよ

メープルリーフのシーズンですね。私は自然や景色を見たりすることが好きです。ですの、カナダの秋は楽しみにしております。去年の秋を思い返すと、いつの間にか紅葉シーズンが終わり、あっという間に冬になっていました。カナダの秋は一瞬で終わるのだと学びました。今年はなんとかメープルリーフを観に行けたらと思っています。

日本でも「秋」という季節は多くの方に楽しまれます。中でも京都には、幾つもの紅葉スポットがありますので、海外からも多くの方がこのシーズンに日本を訪れます。

【次頁に続く】

佛心

二〇二六年 十月号
浄土真宗本願寺派
トロント本願寺

今月の正信偈／出世本懐のこころ



如來所以興出世 唯說弥陀本願海
五濁惡時群生海 応信如來如實言

【原文】

【現代語訳】

如來が世に出られるのは、ただ阿彌陀仏の本願一乗海の教えを説くためである。
五濁の世の人々は、釈尊のまことの教えを信じるがよい。

今月の『正信偈』に入る前に、ラリー・サンデーで紹介した「仏教スピリチュアルケア継続基金」について、少しお話ししたいと思います。これは、二〇三〇年に迎えるお寺の創立八十五周年に向けて、私から提案させていただいたプロジェクトです。

私はこのプロジェクトが、お寺にとって、トロントの地域社会特に日系コミュニティとのつながりをさらに深めていくために、とても大切なものだと考えています。この基金を通して、お寺の役割を寺院の中だけにとどめることなく、病院やホスピス、長期介護施設、そしてご自宅など、人が本当に仏教的な支えを必要とするときに、寄り添うことのできるお寺にしていきたいと願っています。

十月からは、このプロジェクトに込めた思いと、これによって将来どのようなことが可能になるのかを直接お伝えするため、約二百人のお寺のメンバーの皆さまと、一人ひとりお会いしてお話ししたいと考えています。ソーシャルメディアやメールで多くのことを伝えられる時代に、一軒一軒訪ねて直接お話しするというのは、少し昔ながらの方法に見えるかもしれませんが、このプロジェクトはこれからのお寺にとって非常に大切なものですから、できる限り皆さまと顔を合わせ、私自身の言葉でこの思いをお伝えしたいと思っています。

キャンペーンは一月から正式に始まり、二〇三〇年の八十五周年に向けて続いていきます。この構想を実現するためには、最終的には現在のお寺のメンバーだけでなく、合わせて四百人を超える方々の支えが必要になります。ご兄弟やご姉妹、いとこ、ご親戚、ご友人、そしてお寺や仏教的ケアに何らかのつながりを感じてくださる日系コミュニティやトロントの方々に、この思いを伝えていただければ幸いです。これからの数か月、多くの皆さまと直接お会いし、お話しできることを楽しみにしています。それでは、今月の『正信偈』に入っていきます。今月の『正信偈』の四句には、浄土真宗における大切な教えである「出世本懐」が示されています。現代の日本語で「出世」と聞くと、仕事で昇進したり、社会的に成功したりする

ことを思い浮かべるかもしれませんが。しかし仏教でいう「出世」とは、仏さまがこの世にお出ましになることを意味します。「本懐」とは、その根本の願い、本当の目的という意味です。つまり「出世本懐」とは、「お釈迦さまは、何のためにこの世にお出ましになったのか」という、素朴でありながら、とても大切な問いなのです。

親鸞聖人は、お釈迦さまは『仏説無量寿經』を説き、その中心にある阿彌陀如來の本願を私たちに明らかにするために、この世にお出ましになったと受け止められました。

ここで、お釈迦さまと阿彌陀さまの違いを確認しておくことも大切です。花まつりで私たちがお祝いするのは、二千五百年以上前にインドにお生まれになり、さとりを聞き、生涯をかけて仏法を説かれた歴史上の仏さま、お釈迦さまです。

阿彌陀さまは、お釈迦さまの別の名前ではありません。お釈迦さまが私たちに阿彌陀さまとその本願を説き示してくださったのです。お釈迦さまの教えを通して、私たちは阿彌陀さまの限りのない智慧と慈悲を聞かせていただきます。

親鸞聖人は、この本願を「本願海」という美しい言葉で表されています。海というものは、岸辺に立って眺めているだけでは、その広さや深さを簡単に測ることはできません。同じように、阿彌陀さまの慈悲は、私たちが自分の心の中につくるさまざまな境界をはるかに超えています。

【次頁に続く】